小学校の事例 東　区 伏古北小学校

「こども環境サミット札幌」に参加した世界の子供たちと植樹を体験。

世界各国の子供たちと桜を植樹。
自ら実際に取組むことで、木や自然に対する
意識も変化し、環境問題を身近に感じるように。

内容 桜の植樹から日本を意識し世界的な視点へ

きっかけは札幌市東区の市民グループが、丘珠地域に「海外の子どもと交流しながら植樹活動をしませんか?」と呼びかけたことであった。この時ちょうど開幕した「こども環境サミット札幌」に参加した世界各国の子供たちと一緒に、総合的な学習の時間の一環として6年生が桜の植樹を行った。

地域活動への参加を児童に呼びかけたことがきかっけとなり、平成22年で3年目。2年目以降、海外との交流の機会に恵まれず学校内での取組になっている。また、現在は総合的な学習の時間で学ぶ時間がとれず、今では放課後を利用して植樹している。

植樹は、北海道千本桜運動で贈られたエゾヤマザクラの苗木をサッポロさとらんどの敷地内に植えた。150メートルの距離に等間隔で苗木を植栽し、スコップで丁寧に土をかけていった。

こどもサミット開催記念

効果 日本 世界 地球へと　広い視野で植樹を考える

自分で大規模に緑を増やす体験やその機会はなかなか無く、実際に目にし、触れることで、児童の木に対する見方や扱い方について意識が変わる様子が印象的であった。今では学校周辺や敷地内で木の枝を折ったりする児童がいなくなったことが効果として表れている。

また、このような大規模な植樹活動を通じて、環境について「次につながる」「結びついている」という意識が生まれ、自分の取組んだことが「日本全体の」「世界の」「地球の」役に立っているという理解につながっている。そして、広い視野で植樹について興味をもつようになっている。

外国の子供たちと植樹①

課題 単発ではなく 目的をもった継続的取組を目指す

活動を続けるには、学校だけではなく、地域の協力が必要である。また、「植樹をした」という単発的な活動ではなく、植樹をとおしてどういったことを学習させたいのか、ねらいをはっきりさせることが重要である。

今回は植樹という活動に「世界」という視野が入ったことで、植樹という活動は世界中でつながっていて、大切に思われていると児童が感じたことが一番の収穫。環境教育に限らず教育全体として、自分で考えて判断できる人を育てることがこれからの目標であり、このねらいを環境教育にどう取り入れるかが、課題として挙げられる。分野が広い分、時として方向性が見えなくなってしまうこと、情報の移り変わりに追いつかなくなってしまうこともあるので、教師の側も勉強が必要だ。「どう考えさせていけばよいのか」に、まだ試行錯誤するところも多い。

「世界に通じる人材の育成」という視点を「環境教育」というフィールドを使って達成できるよう、「授業」の内容として位置付け、カリキュラム化すべく取組んでいるところだ。

外国の子供たちと植樹②

平成22年度の植樹

広げよう つなげよう 環境学習の輪

実施校から メッセージ

必ずしも1つの教科にあてはめるのでなく、地域の特色なども生かしながら、様々な視点からみることが大切です。本校では、「教科書の枠組みを越え、自分で見て触れることで驚きや体験が心に残る活動」をとおして学ばせることを理想としています。